

(書評者)
武庫川女子大学・教授
寶田穂

『組織のストレスと
コンサルテーション
対人援助サービスと職場の無意識』

The Unconscious at Work: Individual and
Organizational Stress in the Human Services

アントン・オブホルツァー、
ヴェガ・ザジェ・ロバーツ＝編
武井麻子＝監訳 榊恵子ほか＝訳

2014年発行
本体4,200円＋税 金剛出版



個人のことは組織のこともある

本書は、次のような状況にある人にお勧めです。

＊職場のストレスに問題意識を持っている人（仕事場
での、自身のストレスの取り扱いに困っている人/
職場のストレス軽減のために一所懸命取り組んでい
るものうまくいかないと感じている人/コンサル
テーションの役割を担っている人など）

＊差し迫った問題はないが管理職の立場にある人

第Ⅰ部は理論、第Ⅱ～Ⅲ部は個人や組織の具体的な
コンサルテーション事例、第Ⅳ部はより健康な組織を
築くための示唆が述べられています。第Ⅰ部から読み
進めるのがよいと思いますが、理論がずっと入ってこ
ないと思ったら第Ⅱ部から読み、もう一度第Ⅰ部に
戻って読むと理解が深まりやすいと思います。

●事例から学ぶ問題状況の理解

私がこの本に初めて触れたのは、監訳者である武井
麻子先生のゼミで、1994年出版の原著の第Ⅱ部の抄
読会をした時でした。先生に解釈していただきながら
読み進めるなかで、腑に落ちる感覚を体験したのを覚
えています。それまでの臨床や教育の現場で“対処困
難”だと思っていた出来事が、「こういうことが起
こっていたのだ」「そういう意味があったのだ」と理
解できると同時に、“対処可能”な出来事に变化した
ように思えました。

それから20年近くが経過し、今回の翻訳が出版
されました。事例の内容は、今読んでも古さを感じさ
せません。個人と個人、個人と組織の間で起きる普遍
的な現象が取り上げられています。

この本の主な理論的基盤は、対象関係論的精神分析
理論、グループ理論、一般システム理論の3つで
す。これらの理論になじんでいない人には難解な部分
があるかもしれませんが、実際のコンサルテーション

事例は大変身近なもので、自分の周辺でも起きそうな
ストレス事例なので、それを通して難しい理論も自然
な形で理解することができます。

●“無意識”の部分に目を向けよ

現在の医療現場で、看護には、「スマート」で「合
理的」で「経済効果の高い」マネジメントが求められ
ています。そのため対人関係のなかで生じるさまざまな
感情（特に怒りや虚しさ、悔しさといったネガティ
ブな感情）は、非合理的なものとして蓋をされてしま
う傾向があります。しかし合理的なマネジメントを目
指し過ぎて、無意識によからぬ事態が生じているかも
しれません。この本では、心をかき乱す感情を意識し
ないように蓋をすると、「患者をモノのように扱った
り、決まりきった日課に固執することで、患者との関
係を脱人格化してしまうこと、また、自分と患者との
間の共通点を見ないようにすること、罪悪感から逃れ
るためにスタッフ自身が病気になり、長期欠勤した
り、くたくたに疲れきってしまったことなど」
(p104)が生じると述べられています。

読者の職場では、こういった現象は生じていないで
しょうか。もしそれらが生じているならば、「心のプ
ロセスと組織のプロセスはパラレルに生じる」
(p231)という著者の指摘を考えてみる必要がある
でしょう。個人のことは組織のこともあり、より健
全な組織運営を目指すならば、問題と見なされる個人
を切り捨てるのではなく、それとパラレル（並行）な関
係にある組織全体のマネジメントが必要なのです。

日常の看護の場で起きている現象の“無意識”の部
分に目を向けるだけでも、個人や組織のよりよい変化
につながるように思います。その意味で、本書は実用
的な本だと思います。

精